

Title	聖徳太子御製法華義疏の研究(花山信勝著, 東洋文庫刊行)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.167- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つであらねばならぬ。(占部百太郎)

聖徳太子御製法華義疏の研究

(花山信勝著)
東洋文庫刊行

聖徳太子が、法華經、維摩經、勝鬘經のいはゆる三經義疏を、御製作されたといふことは、法王帝説、若しくは、法隆寺資財帖の明記する所であると共に、日本書紀にも、太子の御講經記事があるわけで、十七條憲法の御製制定と共に、もはや、疑ふべからざる、史的事實である。併し、それが、佛教經典の註疏なるが爲めに、從來、一般歴史家等の注意を逸し去つたのみならず、永い年代の間には、流布本の誤傳等があつて、これを以て、聖徳太子の親作とするに、躊躇する者も出た。とは雖へ、未だ曾て、これが偽書たることを論じた者もなければ、逆に、これが、眞作たることを、積極的に、立證したる學者も乏しかつた。併し、この事は、何といつても、國史研究家の重大なる責任であつて、古事記や、日本書紀のみが、唯一の最古の文獻でないことを、先づ知らねばならぬ。

本書は、實に、かゝる古事記や、日本書紀の編纂を遡ること、百年以前に成れる本邦最古の文獻たる、いはゆる聖徳太子の御製作法華經義疏の文獻文化的的研究論文である。著者は、聖徳太子奉讀會の研究員の一人であつて、本書は、最近、東洋文庫論叢の第十八之一號として、同文庫によつて公刊されたものである。

さて、本書の内容は第一編、聖徳太子の三經序論、第二編、御草本法華義疏の研究、第三編太子御所以の法華經原本を考究す。

第四編、法華義疏釋の傳承關係、第五編、法華義疏と法華義記との法華經科文の對比研究、第六編、法華義疏に現はれたる太子の佛教、及び附録、法華義疏の梗概、並に別冊として、法華義疏と法華義記との法華經科文の對比圖表より成立する、浩瀚なるものである。

而して、第一編は、三經一般に關する序論のやうなもので、三經の眞偽問題につき、又は三經御製作の年代につき、又は、太子の三經御撰定の事情と理由につき、考證してゐる。即ち、著者は、諸種の文獻文化史料によつて、當抵、太子の三經義疏御製作の否定し難きことを證すると共に、現在の御物法華義疏が、その書風や、字體の考證の結果、並に添削修正の苦辛の跡あり、或は、思想の傳承關係より觀て、疑ひもなく、著者直筆のものであると論じてゐる。又その御製作年代を、日本書紀によつて、大體、太子御講經の推古十四年(西紀六〇六)より、太子の師慧慈の歸國したる推古二十三年(西紀六一五)迄の間、即ち、太子が三十三歳より、四十二歳までの間と、推定してゐる。従つて、推古十五年(西紀六〇七)の小野妹子遣隋の目的も、大半は、佛經疏の輸入にあつたらしい。又三經御撰定の理由として、鳩摩羅什以來の支那大陸南北兩朝佛教の大勢より、或は、太子の當時に於ける三韓佛教の事情より、或は、本邦流傳の經典の上より、考察して當時、勝鬘、維摩、法華の三經が、最も、普及してゐた故であると論じてゐる。更に第一編の註記として、三經義疏に關する近代的論說の代表的著述を、列擧されてゐることは、研究者にとつて、非常に便誼である。

第二編では、主として、御物法華義疏を、現存の諸種の流布本の法華義疏や、法華經典、及び聖德太子が、常に本義として、依據したる梁朝光宅寺法雲師の法華義記との比較研究をなすと共に御物本に現れてゐる添削修正の文字に關する内面的觀察を試み、それによつて、御物本が、疑ひもなく、御直筆なることを立證してゐる。

第三編では、太子御所依の法華經本は、何處までも、鳩摩羅什譯二十品本の妙法蓮華經であつて、今日用ゐられてゐる、現傳羅什譯二十品本でないことを論ずると共に、法華經の最も古い形の一種を、太子の義疏より窺はんと試みたものである。

第四編では、太子の法華義疏が、古來光宅寺法雲の法華義記を、専ら手本としたものであると傳へられるが、果して、何れの程度まで、光宅本に依據したるかを確むると共に、嘉祥、若しくは、天台の疏典を通じて、光宅以外の一二の經疏、例へば、龍師、又は道生、慧基系統の學者の舊説が、用ゐられてゐる事實を、證明してゐる。然らば、太子の法華義疏が、法雲の法華義記や、その他の大陸的佛教の成果を、そのまま、無批判的に受け容れたものであるかといへば、著者は斷じて、然らざることを、釋文、句釋の上から、一々、例證を指示して、これを立證してゐる。又、太子が、釋文、句釋の上に、如何に簡潔なる用語と、行文を用ゐられたるかに關して、又、太子の御議論が、如何に實際的にして、自主的であつたかといふことを精密に、論證されてゐる點は、實に、敬服の外ない。例へば、聖德太子の法華義疏中に於て、その最も太子の面目が、躍如としてゐる所は、安樂行品の「常好坐禪、

在於閑處、修攝其心」の解釋である。光宅の義記でも、果た又天台大師天顛の法華文句でも、三論宗祖師嘉祥大師でも、等しく、この經文を坐禪に親しみ、近づくと解してゐるにも拘らず、太子は「常に坐することを好む少乘の禪師に親しみ、近づくと勿れ」と、全く、逆説を行つて、しかも、法華大乘の即世佛法の精神を明かにしてゐる。誠に、著者が申された如く、經文表面の字句に拘泥せず、又傳統の古釋にも拘泥することなく、太子御独自の大乘的御精神を以て、自由に、經文を解釋されてゐるには、驚かざるを得ないのである。この一事によつても、吾等は、法王帝説の「王ノ命幼少にして、聰敏、智有り、長大に至るの時、一時に八人の自言を聞きて、其の理を辨ふ」とか、「王ノ命能く涅槃常住、五種佛性を悟り、明かに法華の三車、權實二智の趣を聞き、維摩不思議解脱の宗に通達し、薩婆多兩家の辨を知り、亦三玄、五經の旨を知る」等の記事の信憑すべきものなることを知るのである。

第五編と、別冊附録の圖表とは、太子の義疏と、光宅寺法雲の義記との科文を比較對照して、その異同を明かにしたものであつて、其處にも太子の法華經に對する態度が、飽くまでも、嚴正批判の下に立つてゐたことが、十分に窺はれる。

最後の第六編は、法華義疏を通じて、聖德太子の佛教觀、思想、信仰及びその實踐道德等を、究明しようとして試みたものであつて、最も興味深い。即ち先づ太子が、法華を以て一大乘佛教とする御精神を推究すると共に、次で理論としての本體論的認識論、並に三世因果の思想を肯定する現實の世界觀と、その絕對平等の覺醒、最後に、實踐原理としての法華信仰の道德及び信仰について

論及してゐる。

これを要するに、義疏を通じて、吾等は太子の全人格を最もよく了解し得ると共に、奈良朝以前の日本の精神文化、並に、その後の國民思想、及びわが佛教發達の動向を最も明かにし得るやうに思ふ。この意味に於て、本書は、各編共に、實に貴重なる研究であつて、これによつて、一般學者のみならず、一般國民が、多大の裨益を得ることを、確信するものである。終りに臨んで、著者に謹んで敬意を表すると共に、尙ほ將來に於て、太子の二經の義疏に關する研究をも、成就されんことを希望する。(一九三四、一月三十日、山本光郎)

東洋古代史

(橋本增吉著
平凡社刊)

本來、東洋史なるものは西洋史に對立し、世界史の一部として敘説すべきものであり、決して我が國史の對照たるべき性質のもので無いとは橋本先生年來の所説である。長年の間、克明な努力を以て書き綴られた先生の東洋史概説が先年漸く上梓されて世に出た時(東洋史講座)、これに對して非常な喜びを感じたものは決して少く無かつたであらう。その後數年の間、東洋史の研究は殷墟、モヘンジョ・ダロの發掘調査等もあり、各方面に互つて著しき進歩を遂げたのであつて、先生もその舊稿に加筆訂正の機會を切望されてゐたのであつた。會々平凡社の世界歴史大系に執筆を依頼せられて本書の誕生を見るに至つたことは獨り先生のみならず、廣く同學諸氏の喜びとさるる所であらう。

先生はその序に忽卒の間に稿を成し、成るに應じて版に附し殆んど全く推敲の餘地が無かつたと述べられてゐるが、單にその目次を辿つて見ても日常の蘊蓄が窺はれ、その努力の結晶たることに首肯せぬものは無いであらう。

先生は先づその序言を草するにあたり「歴史と人生」なる一節に筆を起し、現實に即した一歴史家としての態度を鮮明にされ、次いで世界史の動向を語り、進んで東洋史の意義及び内容を述べ、更に東洋史の研究に缺くべからざる亞細亞の地理及び民族の智識を詳細に説明されてゐる。最後に西曆紀年法を採用した理由を物語つて居られるが、先生の學究的態度に於ける如何にも丁寧な一端を其處に窺ふことが出來よう。

第一章、東洋文明の起源に於ては東洋文明の起源と特性とを明かにし、これを西洋文明と比較對照させ、更に進んで全人類の立場から世界文明の完成を説かれてゐる。先生の眞面目の片鱗を最もよく見ることが出来るのは第二章、支那文明の發達であらう。西歐人の支那研究がややもすれば型式の類似に誤まられて、史料の精査批判を忘るる短所あるを排し、あくまで精密な考證に基く研究を強調されてゐる。第三章、印度文明の發達は佛教の誕生に筆を起し、次いで支那に於ける儒教が漢室によれると同じく、印度に於ける佛教も摩揭陀國摩利耶王朝の威力によつてその精神的大統一の機運を醸出した事情がつぶさに記されてゐる。第四章、亞細亞南北兩系統民族の抗爭に於ては先づ匈奴の興盛に伴ふ月氏の南下を記し、匈奴と漢武の争鬪から西域との交通が開け、漢は東朝鮮、南諸蠻をも併せるに及んで國威盛大を極はめ、然も内實